

## 令和2年度8020公募研究報告書抄録（採択番号：20-02-18）

**研究課題：**インプラント治療は高齢者の残存歯を守り QOL を高めるか？

**研究者名：**窪木拓男<sup>1)</sup>（口腔インプラント学会研究推進委員会）、黒崎陽子<sup>2)</sup>、<sup>3)</sup>、大野 彩<sup>2)</sup>、<sup>3)</sup>、三野卓哉<sup>1)</sup>、荒川 光<sup>4)</sup>、小山絵理<sup>3)</sup>、中川晋輔<sup>3)</sup>、Ha Thi Thu Nguyen<sup>5)</sup>、逢坂 卓<sup>3)</sup>、佐伯真未子<sup>3)</sup>、水口 一<sup>3)</sup>、大野充昭<sup>3)</sup>、<sup>5)</sup>、前川賢治<sup>1)</sup>、會田英紀<sup>6)</sup>、澤瀬 隆<sup>7)</sup>、鮎川保則<sup>8)</sup>、秋山謙太郎<sup>3)</sup>、大島正充<sup>9)</sup>、佐藤祐二<sup>10)</sup>、佐藤洋平<sup>1)</sup>、廣安一彦<sup>12)</sup>、山田陽一<sup>13)</sup>、阪本貴司<sup>14)</sup>、宮崎 隆<sup>10)</sup>、<sup>15)</sup>

**所属：**<sup>1)</sup> 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 インプラント再生補綴学分野、<sup>2)</sup> 岡山大学病院 新医療研究開発センター、<sup>3)</sup> 岡山大学病院 歯科・口腔インプラント科部門、<sup>4)</sup> 岡山大学歯学部（臨床准教授）、<sup>5)</sup> 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 分子医化学分野、<sup>6)</sup> 北海道医療大学歯学部 高齢者・有病者歯科学分野、<sup>7)</sup> 長崎大学 大学院医歯薬学総合研究科 口腔インプラント学分野、<sup>8)</sup> 九州大学歯学研究院 インプラント・義歯補綴科、<sup>9)</sup> 徳島大学大学院医歯薬学研究部 顎機能咬合再建学分野、<sup>10)</sup> 昭和大学歯学部 高齢者歯科学講座、<sup>11)</sup> 鶴見大学歯学部 有床義歯補綴学講座、<sup>12)</sup> 日本歯科大学新潟生命歯学部 口腔インプラント科、<sup>13)</sup> 大阪歯科大学 口腔インプラント学講座、<sup>14)</sup> 口腔インプラント学会（学術担当常務理事）、<sup>15)</sup> 口腔インプラント学会（理事長）

**【目的】** 残存歯や補綴装置自体の予後に加えて、患者立脚型アウトカムの長期推移を明らかにすることは、臨床エビデンスに基づいた補綴歯科治療オプションの選択を可能とするために必須と思われる。本研究は、補綴歯科治療終了後長期経過した患者の残存歯や補綴装置の予後に加えて、口腔関連 Quality of Life (QOL) レベルを明らかにすることを目的に、過去にインプラント義歯 (IP)、ブリッジ (BR)、床義歯 (RPD) 治療の前後に口腔関連 QOL 評価を受けた患者の追跡調査を行い、6年経過後の口腔関連 QOL 評価を行った。

**【方法】** 治療前後の口腔関連 QOL 評価を受けた欠損歯数が8歯以下の患者138名 (IP群/BR群/RPD群：78/37/23名)のうち、追跡調査に同意が得られたものに、口腔関連 QOL 質問票調査、口腔内診査ならびに後ろ向き診療録調査を行った。その結果、全てのデータが揃った解析対象は105名 (IP群/BR群/RPD群：58/27/20名、平均追跡期間6.1±1.2年)であった。まず、対象補綴装置の累積生存率を算出し、比較した (Kaplan-Meier 法, Log-rank 検定)。次に治療前後ならびに追跡調査時の口腔関連 QOL 得点の比較を治療法別に行った (Steel-Dwass 検定)。本研究は岡山大学大学院医歯薬学総合研究科疫学研究倫理審査委員会の承認を得て行った (承認番号628)。

**【結果】** 追跡調査時の対象補綴装置は、IP群では生存/非生存 (インプラント体脱落)：54/4名、BR群では生存/非生存 (除去, 脱落, IP/RPDへ移行)：20/7名、RPD群では生存/非生存 (再製, 使用なし, IPへ移行)：5/15名であった。また、6年累積生存率は、IP群：94.7%、BR群：77.4%、RPD群：33.3%で、IP群が他の2群に比べ有意に高かった (p=0.01)。追跡調査時の残存歯数は、IP群がRPD群に比較して有意に多かった。一方、追跡期間における抜歯の頻度や抜歯本数に各治療群間で有意な差は認められなかった。そして、IP群では治療前に比べて、治療後および追跡調査時の口腔関連 QOL 得点が有意に高かった (p<0.01)。しかし他の2群では、いずれの口腔関連 QOL 得点にも有意差は認められなかった。

**【結論】** IP群では、補綴装置の6年累積生存率が他の2群と比べて有意に高く、治療後に改善した口腔関連 QOL を6年経過後も維持していることが明らかとなった。